令和5年度企画展

商人たちの選択

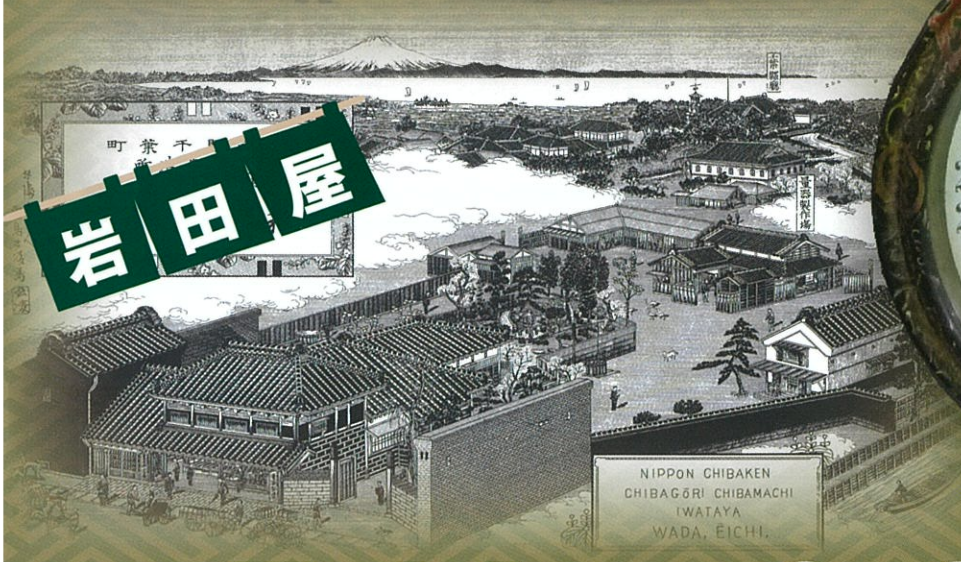
～千葉を生きた商家の近世・近現代～



奈良屋



多田屋



岩田屋

時計（奈良屋）
千葉県立中央博物館
大利根分館蔵

2023 7・11（火）▶ 9・3（日）

入館無料

千葉市立郷土博物館

●開館時間　9:00 ～ 17:00
（入館は 16:30 まで）

●休館日　月曜日
（祝日の場合は翌平日）

〒260-0856　千葉市中央区亥鼻 1-6-1
TEL043-222-8231　FAX043-225-7106

郷土博物館 HP

千葉開府 Road to 900 since 1126

江戸時代に物流の拠点として繁栄した千葉町は、明治6年(1873)に千葉県が成立すると、県庁が置かれて県都となりました。大正時代に市制が施行され、昭和時代には空襲で被害を受けたものの、戦後復興・高度成長で再び繁栄を遂げるなど、激動の時代を歩んできました。今年は県都となって150年の節目の年に当たります。本展では、その激動するまちの歩みを商業活動に焦点をあてて見ていきます。千葉のまちの繁栄を支えた多くの商家がある中で、今回は特徴ある３家を中心として取り上げ、事業の様子や時代の激動の中における商人としての様々な選択について紹介します。

岩田屋



岩田屋（明治末～大正初期）　個人蔵

現在の店名は「和田商店」。近世末の天保年間(1830～44)の創業。都川に架かる大和橋の際で今も営業を続ける。江戸時代には、佐倉藩から炭方取締頭取に任命され、寒川村の船主を通じて、藩の特産物の「佐倉炭」を江戸に出荷していた。明治以降は、県都となったことを契機に紙類の販売を主力に、文具類を取扱うようになる。また、第九十八銀行(現在の千葉銀行)の創立に貢献し、さらに千葉量器製作株式会社を立ち上げるなど、新たな事業に乗り出したこともあった。

多田屋

千葉県下で最も古い由緒を持つ書店。江戸時代に上総国東金町で医師だった能勢家は、文化2年(1805)から書店経営を始め、明治時代になると、書籍の版権免許を取得して出版も行うなど、県下で書店としての基礎を固めた。「七福神」と呼ばれた能勢家の七兄弟は、千葉や八日市場などで支店を開業し、多角的な事業を展開した。特に、千葉支店の能勢鼎三は、三省堂の経営にも参画し、四階建てのデパート建設も計画するなど積極的に事業拡大を図った。長く県都における最も充実した品揃えの書店として君臨した。



多田屋東金本店（明治20年代）
個人蔵

奈良屋



奈良屋千葉店（大正3年）
（公財）奈良屋記念杉本家保存会蔵

寛保3年(1743)に京都で呉服商として創業。江戸時代後期には、「他国店持京商人」として佐原・佐倉に出店し、佐倉藩主や伊能忠敬などとも交流した。明治42年(1909)に出店した千葉店は、順調に売り上げを伸ばし、昭和5年(1930)には本店となっている。戦後に千葉随一の百貨店となった奈良屋は、昭和46年(1971)に三越と提携して、国鉄千葉駅前にニューナラヤを創立し、旧来の店舗をセントラルプラザとして模様替えした。千葉店を飛躍させた８代目杉本郁太郎は、杉本北柿という名で俳人としても活躍するなど、文化活動にも手広く参画した。京都には重要文化財「杉本家住宅」が現在も残る。

千葉市立郷土博物館

〒260-0856　千葉市中央区亥鼻 1-6-1　　TEL043-222-8231

郷土博物館
公式 Twitter



交通案内

◎JR千葉駅下車、東口バス乗り場７番から京成バス「千葉大学病院」行き、または「南矢作」行きで「郷土博物館・千葉県文化会館」下車、徒歩3分
◎千葉都市モノレール「県庁前駅」下車、徒歩13分
◎JR本千葉駅下車、徒歩15分
◎京成千葉中央駅下車、徒歩20分